ICU 60th Year
国際基督教大学
INTERNATIONAL CHRISTIAN UNIVERSITY

ICUにおける英語教育
― グローバル人材を育てる教授法と学生の体験 ―

実施報告書

2014.11.29 sat 13:00 – 19:00

国際基督教大学 東ヶ崎潔記念ダイアログハウス

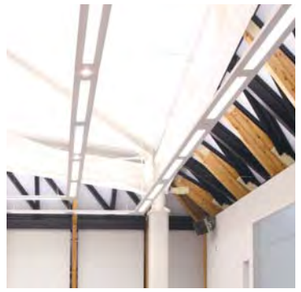
シンポジウム：13:00 - 17:00 国際会議室 / 情報交換会：17:15 - 19:00 大学食堂

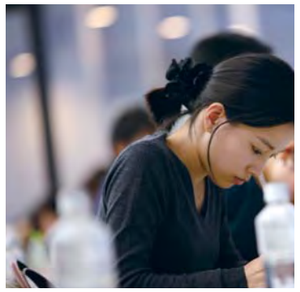
GGJ
GO GLOBAL JAPAN
INTERNATIONAL CHRISTIAN UNIVERSITY

国際基督教大学献学60周年記念事業
文部科学省事業『スーパーグローバル大学等事業 経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援』
主催：国際基督教大学　協力：公益財団法人 日本英語検定協会

CONTENTS

ICUにおける英語教育
- グローバル人材を育てる教授法と学生の体験 -
29 November 2014





Welcome Note
ご挨拶／国際基督教大学 学長 - 日比谷潤子 3

ELA Overview
グローバル社会で活躍する英語力を身に付ける集中英語プログラム 4
リベラルアーツ英語プログラム（ELA：English for Liberal Arts Program）

ELA概要説明／ ELA 主任 - 岩田祐子 6

01 Presentation
Readingをどのように教えているか／ ELA 課程准教授 - 渡辺敦子 10

02 Presentation
Writingをどのように教えているか／ ELA 専任講師 - 渡邊(金)泉 14

03 Presentation
学びを支えるTutorialをどう行っているのか／ ELA 専任講師 - 宮原万寿子 18

04 Presentation
Wコースについて ー 専修分野に特化したアカデミックライティング ー／ELA 課程准教授 - 深尾暁子 22

05 Panel Discussion
ELAで学んで／卒業生 - 渡貫諒／教養学部4年 - 秋山肇／修士2年 - 森由樹子／教養学部2年 - 丹波小桃 26

06 Panel Discussion
教員の側から 28

Reference
グローバル人材とELA 30

Welcome Note ご挨拶

国際基督教大学における英語教育の教授法の共有を目指して

国際基督教大学 学長
日比谷潤子

みなさま、ようこそ、国際基督教大学へおいでくださいました。本日のシンポジウムは、文部科学省事業の『経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援』の一環として実施いたします。本学ではこの事業で3つの柱を掲げておりますが、そのうちの「英語運用能力の伸長」と「英語開講専門科目履修を通じた情報発信能力（ライティング）の涵養」の2つに焦点を当てております。このシンポジウムでは「ICUにおける英語教育」と題しまして、グローバル人材を育てる教授法をご来場いただきましたみなさまと共有することを目指しております。

本学は1953年に第1期生を迎え、献学されました。昨年度はちょうど60周年記念にあたる年でした。そうした節目の時に、大学献学時の資料を集め、関係者の方々のお話を伺う機会を得ました。そのなかで、献学にあたり当時の文部省（現・文部科学省）に提出された資料を調べましたところ、「大学における言語に関する項目」がございました。その資料によりますと、「日英両語を学園用語とする」と記載されておりました。つまり、「日本語と英語を教育・研究はもちろん、日常生活に至るまでキャンパスの公用語として、バイリンガルの大学をつくる」という趣旨に基づいて献学された大学であることが記されております。

日英両言語を公用語とするということですが、日本で主に教育を受けて大学に入学してきた学生にとっては、そのレベルに達するまでに、かなり高度な英語力を身に付けなければなりません。そのために本学がどのような英語教育を実践してきたかということが、本日のシンポジウムにおける主題となります。

ご来場いただいている方のなかには、卒業生の方もいらっしゃるかと思います。名称こそ、FEP（Freshman English Program）やELP（English Language Program）、そして現在はELA（English for Liberal Arts Program）と変遷をたどっておりますが、献学以来、本学が目指してきた英語教育の趣旨は変わっておりません。それは、「英語でリベラルアーツ教育を行う」ということです。本日は、現在、実際にELAのプログラムで教育にあたっている教員たちから、できるだけ具体的に、ICUの英語教育の現状をお伝えし、その内容をご理解いただく機会になればと考えております。特にご質問等、活発にしていただければ、大変ありがたく存じます。また、本日のプログラムの後半は現役学生、卒業生を含め、このプログラムで学んだ学生の座談会をいたします。実際の教育を受けた側からの“生の声”にも、ぜひ耳を傾けていただければと思います。

本日はどうもご来場ありがとうございます。有意義な午後のお時間をお過ごしくださいませ。

グローバル社会で活躍する英語力を身に付ける集中英語プログラム

リベラルアーツ英語プログラム（ ELA：English for Liberal Arts Program ）

● 献学以来の徹底した日英バイリンガリズム

本学は、自分の社会や文化の常識を当然視することなく、未知の価値や思想に接して対話を重ね、他者との新たな関係の中に自己を見つめ直すことができる人の育成を目指しています。そのためには卓越したコミュニケーション能力が必須であり、必要とされるのは、「日英両語の言語運用能力」です。献学以来、日英両語を公式言語とするバイリンガリズムが貫かれており、卒業要件として4月入学生には「リベラルアーツ英語プログラム（ELA：English for Liberal Arts Program）」を、9月入学生には「日本語教育プログラム」の履修を課しています。

● 英語力を高め、思考力を養う

「リベラルアーツ英語プログラム（ELA：English for Liberal Arts Program）」は、4月入学生が、1年次の大半を費やして、集中的に英語運用能力を伸長させるプログラムです。習熟度に応じて課程（Stream1～4）が決まり、各課程では約20人ずつの「セクション」と呼ばれる少人数のクラスに分かれ、週5コマから12コマの授業を履修します。「異文化コミュニケーション」や「生命倫理」などのテーマで関連文献を読み、議論し、小論文などを書くことによって創造的、批判的、主体的に考える力を磨きます。さらに、すべて英語で行われる授業に参加することで、大学で必要となる実践的な英語力を磨きます。

入学時点で英語の習熟度が高い学生は、短期間で集中的に学び、じっくり英語力を伸ばしたい学生には十分な指導と演習の機会を用意しています。ELAで学ぶプレゼンテーションの仕方、講義の聴き方、語彙構築などは、英語学習のためだけでなく、大学で学ぶための重要な土台となるものです。ELAの終わりには、教養学部での研究や論文執筆に備え、全員が学術研究の基礎を学ぶコースを履修します。

ELAは学生の興味・関心を起点にして学習意欲を最大限に引き出し、学問に積極的に取り組む姿勢を促すプログラムです。授業は少人数制で、学生同士や教員との活発な関わり合いやディスカッションに重点を置く、リベラルアーツへの重要な導入教育となります。

● ELA Structure

ELA では 4 月入学生全員が、自分のニーズや習熟度に合った課程（Stream）で「リベラルアーツ教育のもとで学ぶために必要な英語」を身に付けます。

入学直後に実施するプレースメントテストの結果と、海外生活経験や中学校・高等学校段階でのアカデミックライティング経験などの情報をもとに課程（Stream）を決定します。各課程内でさらに約 20 人ずつの「セクション」と呼ばれるクラスに分かれ、セクション単位で授業を行います。最後の 1 学期は「Research Writing（論文作成）」をどの課程の学生も必ず履修。研究テーマに関する資料を集め、個人指導も交えながら、英語で論文を書き上げます。

[Advanced English]

ELA 修了後も英語力を磨きたい学生には、選択科目として Advanced English（上級英語）を開講。TOEFL 準備やプレゼンテーション技術の向上を目指すコースなどがあります。

	1年次			2年次		
	春学期	秋学期	冬学期	春学期	秋学期	冬学期
Stream 1 TOEFL (PBT) 600点以上	週5コマ ■ ARW	週4コマ ■ Research Writing （論文作成）				
Stream 2 TOEFL (PBT) 550-600点	週6コマ ■ ARW ■ AS	週6コマ ■ ARW ■ AS	週4コマ ■ Research Writing （論文作成）			
Stream 3 TOEFL (PBT) 450-550点	週10コマ ■ ARW ■ RCA ■ AS	週10コマ ■ ARW ■ RCA ■ AS	週9コマ ■ ARW ■ RCA ■ AS	週4コマ／春・秋・冬いずれかの1学期 ■ Research Writing（論文作成）		
Stream 4 TOEFL (PBT) 350-450点	週12コマ ■ ARW ■ RCA ■ AS	週10コマ ■ ARW ■ RCA ■ AS	週10コマ ■ ARW ■ RCA ■ AS	週3コマ ■ FRW （論文作成基礎）	週4コマ／秋・冬いずれかの1学期 ■ Research Writing （論文作成）	

■ ARW（読解と論文作成） ■ RCA（精読と英文構成法） ■ AS（アカデミック・スキル）

● ELA Course Descriptions

■ ARW Academic Reading & Writing（読解と論文作法）

Stream1～4のすべての学生が履修。学生の関心が高いアカデミックなテーマを通して読解力、理解力、討論力、論文作成力を高めます。ネイティブスピーカーの教員が担当し、個人指導（チュートリアル）も重要な要素です。

■ RCA Reading & Content Analysis（精読と英文構成法）

Stream3と4の学生が履修。学術論文を読み込んで分析する読解力を身に付けることを目指します。個人指導（チュートリアル）もあり、日本語母語教員が担当します。

■ AS Academic Skills（アカデミック・スキル）

Stream2～4の学生が履修。講義の聴き方、ノートの取り方、語彙の構築、ディスカッションとプレゼンテーション・スキルの訓練、および大学での学びに必要となる様々な技術を学びます。ASには必修科目と選択科目があります。

■ FRW Foundations of Research Writing（論文作成基礎）

Stream4の学生のみ履修。1年次のカリキュラム修了後、RW（Research Writing）履修前の準備として、学術論文作成の基礎について学ぶ科目です。1年次の学習と2年次の論文作成の橋渡しとなる指導が行われます。

■ RW Research Writing（論文作成）

ELAを締めくくる科目です。学生が興味を持って取り組めるアカデミックなテーマ（「ロックの歴史」「マスメディア」「日本の英語教育」など）を研究し、論文を仕上げます。論文作成にあたり、教員がきめ細かな指導をします。

海外英語研修プログラム（SEA：Study English Abroad）

ELA の単位の一部を海外で修得できる

SEA (Study English Abroad) とは、夏休みを利用して異文化体験をしながら、集中的に英語を学習することで、視野を広げ、英語でコミュニケーションができる力を身に付ける「海外英語研修プログラム」です。修得した単位はELAの履修単位として認められます。海外生活未経験者は優先的にこのプログラムを利用することができます。SEAへの参加により、自分がマイノリティとなる経験を通して、自分を知る、自信を持つなど、自分自身の内面的成熟も期待されています。

概　要　（ 2014 年度 ）

フレッシュマン SEA プログラム

1年次の夏休みに、カナダ、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、アイルランドおよびイギリスで行われる約6週間の英語教育プログラムです。

■定員：210名
■研修校：[カナダ] ブリティッシュ・コロンビア大学、ヴィクトリア大学／[アメリカ] セント・マイケルズ大学、タフツ大学／[アイルランド] ユニバーシティ・カレッジ・ダブリン／[イギリス] シェフィールド大学、サセックス大学、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院／[オーストラリア] モナシュ大学／[ニュージーランド] ワイカト大学
■選考方法：応募者多数の場合、海外経験などを考慮した上で抽選、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院は書類と面接により選考
■履修単位：4単位
■費用：約50～80万円（授業料、宿泊費、渡航費など）

ソフォモア SEA プログラム

2年次の夏休みに、カナダ、アメリカ、イギリスで行われる約6週間の英語教育プログラムです。

■定員：60名
■研修校：[カナダ] ヴィクトリア大学／[アメリカ] ワシントン州立大学、ウィスコンシン大学ミルウォーキー校／[イギリス] エセックス大学
■選考方法：書類と面接により選考
■履修単位：4単位
■費用：約50～70万円（授業料、宿泊費、渡航費など）

ELA Overview

ELA概要説明

グローバル社会で活躍する英語力を身に付ける

ELA主任 岩田祐子

日本語と英語の二言語をキャンパスの公用語とする本学では、bilingual communityが成立しています。教育や研究だけでなく、教授会などの学内会議は日英二言語で行い、大学から示される公文書も日英二言語で書かれます。また、外国籍の専任教員の比率は全体の34%と世界的にも高い水準であり、英語で開講される授業も多いのが特徴です。

このような環境において、学生が4年間で学びを達成するためには、日本語だけでなく、高い英語力も求められます。しかもそれは、単に話したり聞いたりすることができる能力ではなく、英語で授業の内容を理解し、英語の文献を読みこなし、英語で自分の意見を表明し、英語でグループディスカッションに参加し、英語でプレゼンテーションを行い、英語で試験を受けて期末レポートを書き、英語で卒論を書く…といった、アカデミックな英語力が不可欠となっています。

このようなアカデミックな英語力を身に付けることが、ELAの第1の目標です。第2の目標は、リベラルアーツ教育で必要な能力、たとえば批判的分析能力や論理的思考力、物事を多角的に見る能力などを、英語の授業を通して身に付けることにあります。本学ではこれら2つの目標を、ELAの徹底した少人数教育によって達成しています。

ELAは、「アカデミックな英語力」と「批判的思考力」の習得を目標とし、そのために学際的なトピックを扱った論文を読み、論文を書くプログラムです。
そのためには、習熟度別の細かいクラス分けが必要です。個々の学生のニーズや英語力に応じた課程（Stream1～4）に分けています。そして、週5～12コマの授業で集中的に学びます。

●ELAの特徴

1. Streaming（課程）… 習熟度別に1～4の4つのStreamに分かれます。
2. Intensive（集中的）… 週5～12コマの英語の授業で集中的に学びます。
3. Small class size（少人数）… 1クラス約20人の少人数教育を徹底します。
4. Tutorials（個別指導）… 専任教員と1対1の個別指導で学びをサポートします。
5. Teaching English through English（英語で授業）… すべての科目を英語で行います。

ELAの概要説明

4段階のStreamで英語漬けの1年間を送る

Streamは1~4の4段階に分かれています。Streamの決定に際しては **1** にあるように、海外経験（小・中・高の段階で英語圏もしくは非英語圏での生活経験）やアカデミックライティングの経験有無を入学前にアンケートで調査します。海外経験がある場合は家族に同行したのか、一人で留学したのか。また、在籍校は現地校かインターナショナルスクールか日本人学校か、といった詳細を調査します。入学直後に実施するプレースメントテストの得点に、これら海外経験を加味してStream分けを行いますが、ボーダーライン上にある学生には個別面談を行います。その際にはライティングサンプルを提出させて、語彙力や文法力、論理的思考力を判断し、最終的に所属するStreamを決定します。

Stream1に属する学生の英語力が最も高く約20人、次いでStream2は約80人、本学で平均的な英語力を持つ学生が集まるStream3は340~360人と多く、語彙力やリスニング力の補強が必要なStream4には約120人が在籍します。それぞれのStreamでは、1クラス約20人の少人数クラスを編成して授業を行います。

2 はStream3の学生の時間割例です。ELAの科目が1週間に10コマ入り、それ以外に一般教育科目や体育、基礎科目を履修します。さらに、これ以外にもELA科目の個人指導（チュートリアル）や予習・復習の時間も必要なため、1年次はほぼ1週間、英語漬けという毎日を送ることになります。

ELAを支えるコア科目

ELAでは **ARW**（Academic Reading & Writing）と **RCA**（Reading & Content Analysis）の2つのコア科目を中心に学び、この2つをつなぐ科目として **LLA**（Lectures for Liberal Arts）が用意されています。最後の学期には **RW**（Research Writing）に取り組み、2000語のリサーチ論文を書きます（ **3** ）。Streamごとにコア科目の履修期間が違い、Stream1の学生は1学期間だけ履修するのに対して、Stream4の学生は1年間コア科目を学び、さらに2年次春学期に1年次に学んだ授業内容を振り返る科目を履修して学びをサポートしたうえで、RWに取り組みます。

コア科目のARWとRCAは、いずれも専任教員のみが授業を担当しています。ARWは原則として非日本語母語教員が担当し、アカデミックなテーマを通して、読解力や理解力、討論力、論文作成力を高めることを目的としています。一方、RCAは原則として日本語母語教員が担当する授業です。学術論文を吟味して読み込んで分析する読解力を習得します。ARWとRCAのいずれにも1対1で個人指導を受けるチュートリアルがあり、学生のニーズや習熟度に応じた指導を行います。

LLAは、ARWとRCAで共通して扱うトピックに関するレクチャーを英語で聞き、背景知識を得るという補助的な役割を担う科目です。これら3つの科目はすべて共通のトピックで連携しています。各科目で読んでいる論文は違っても、共通のトピックについて読むことにより、多角的な視点で文献を読む力を養い、ディスカッションを通じて、内容理解を深めていきます。

AS（Academic Skills）は、コア科目の学びに必要となるスキルを習得するクラスです。たとえば、講義の聞き方やノートの取り方、プレゼンテーションスキルの訓練ならびに大学での学びに必要なスキルを学びます。こちらは週1回の授業で、非常勤教員も指導にあたります。

ELAの集大成となるRW（Research Writing）は、論文の書き方を学ぶ科目です。2000語の論文作成を目標として、トピックの選択からスタートします。その後、図書館で調べ、アウトラインを作り、ドラフトを書いてチュートリアルで個人指導を受けながら最終ドラフトをまとめていきます。学生は大きなテーマ設定はできても、具体的に絞り込んでいくことはなかなかできないため、教員のサポートを受けながら、何度も修正を重ねて，最終的に2000語の論文を書き上げます。

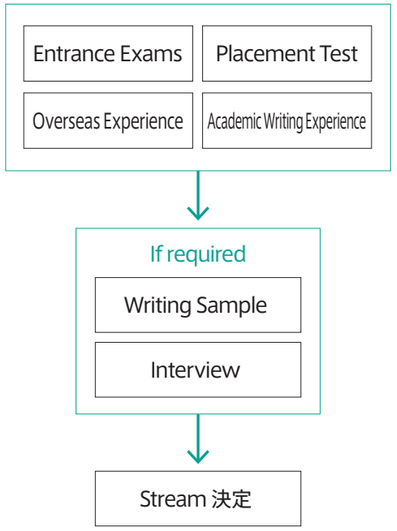
4年間のカリキュラムにおけるELAのあり方

本学での4年間のリベラルアーツ教育において、ELAはその基盤となる学びといえます。ELAで扱う学際的なトピックは、ELA修了後、2年次の終わりに専攻するメジャー（専修分野）の選択に深い関わりをもちます。メジャー選択までに幅広いトピックを扱うことで、自分が興味関心のあるトピックがわかり、何を学びたいのかを選ぶことができるのです。また、英語の文献を批判的かつ分析的に読む力を身に付け、学生同士や教員との活発な議論を行うことは、学部での学びでも生かすことができます。さらに、早い段階からチュートリアルや図書館における文献検索等に慣れておくことは、卒業論文を書く際にも役立つでしょう。

こうしてELAを通して身に付けた英語力やアカデミックスキルを実践する場が、**4** にある「海外英語研修プログラム（SEA）」です。これは英米などの英語圏の大学で異文化を体験しながら、集中的に英語を学び、コミュニケーション能力を高める6週間のプログラムです。これらを経験したのち、3年次から9カ月間の交換留学を目指す学生も多くいます。

ELAの成果を測るには、本学のbilingual communityで必要な英語力と批判的思考力をどれだけ習得できたかを常に検証する必要があります。それには、3年次の交換留学者数、英語開講科目の履修者数、英語で卒業論文を書く学生数、卒業後の就職や大学院進学のデータなどの推移から測る必要があると考えています。今後の課題としては、学生のニーズや英語力、社会情勢に合わせてどのような対応をするかを考え、短期的かつ長期的にプログラムの達成度評価を行うことが求められます。そして、その結果に応じてプログラム内容を改善していく必要があると思います。

1 入学時のStreaming

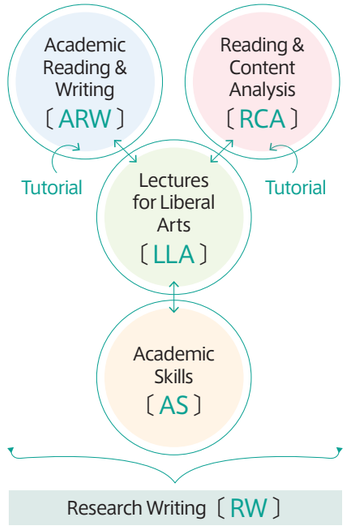


2 集中英語プログラム（Stream3 時間割例）

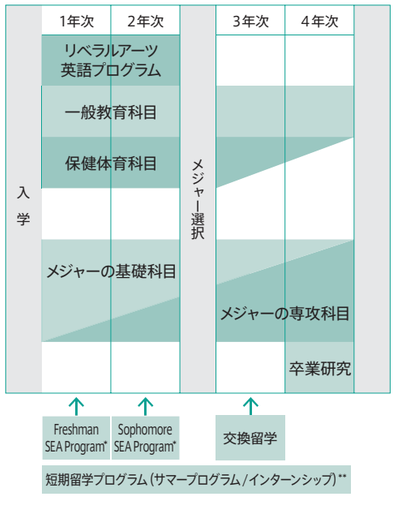
	MON	TUE	WED	THU	FRI
1		Lectures for Liberal Arts			ARW Tutorial
2	Academic Reading & Writing	Academic Skills		基礎科目	Reading & Content Analysis
3	一般教育科目	基礎科目	一般教育科目	基礎科目	一般教育科目
LUNCH TIME					
4			Academic Skills		Academic Reading & Writing
5	Academic Skills		Academic Reading & Writing	基礎体育	
6		Reading & Content Analysis			保健理論

※ 上記時間割以外にも個人指導（チュートリアル）があります。

3 ELAの各科目間の連携



4 大学全体のカリキュラムにおけるELA



* SEA Program：Study English Abroad Program（P.5参照）
**ICUではサービス・ラーニングと呼ばれる非営利機関における30日以上の無償のサービス活動と振り返り（リフレクション）により、単位を修得できるプログラムがあります。

01 Presentation

Readingをどのように教えているか

英文を読むことのみならず学習能力を身に付ける

ELA 課程准教授 渡辺敦子

本学では、グローバル人材の育成について「国際的社会人としての教養をもって恒久平和の確立に資する有為の人材を育成」と定義しています。「グローバル人材育成における英語教育」や「リベラルアーツ教育における英語教育」といったテーマで講演をすることがありますが、講演を終えると来場者の方からよく「これはICUだからできることではないか」と言われます。確かに、ICUの学生は優秀です。しかし、彼らの努力なしに、そして私たち教員の工夫なくして、グローバル人材の育成は考えられないと思います。これまで、様々な形で「ICUの英語教育」について発信してはきましたが、その一方で発信が足りなかったのではないかとも考えております。そこで今日は、リーディングをテーマに、学生たちがどのような学びをしており、教員たちはどのような指導をしているのかをお話したいと思います。

Readingとは

RCAとARWの２つのコア授業で学ぶ

ELAでは、2つのコア授業でリーディングを学びます。それは日本語母語教員が教えるRCA（Reading & Content Analysis：**精読**）と、非日本語母語教員が教えるARW（Academic Reading & Writing:**多読**）です。いずれも目的は「英文を読むことのみならず、学習能力を身に付ける」ことです。

一般的に「精読」というと、わからない単語や発音を調べる、文章の構成を勉強するといった「英文解釈」のような読み方をイメージするでしょう。しかし、本学の「RCA（精読）」の授業は「英文解釈」にはとどまりません。授業では「意味と論理を正確に把握」することを行っています。また、「客観的事実を確認する技法」や、テキストのジャンル、構成、論調、社会的・文化的文脈などを分析する力を身に付けることにも取り組んでいます。

一方、「ARW（多読）」の授業では、論文作成を行い、討論の向上に努めます。特にフォーカスされるのが、「批判的思考能力の習得」で、「自己表現能力」を付けることを目的としています。

シラバスに示される学習成果から自分の学習計画を立てる

RCAの授業初日は、**1** のようなシラバスが配布されます。シラバスには「トピック」と「教材」が記載されています。このシラバスでは、トピックは「教育の価値」で、"What Every Yale Freshman Should Know"という教材が用意されています（**2**）。そして、Before Reading、While Reading、After Readingで行う学習活動をそれぞれ提示しています。付されている番号は、「学生たちに期待される学習成果の目標」です。Before Readingではテキストの内容を推測します。著者、トピック、読者、目的を考え、トピックを確認します。While Readingにおける学習成果は、テキストへの書き込み方を学ぶことです。これは、テキスト内のキーワードを関連付け、テキストの余白を使い、テキストとコミュニケーションを取り、自分の書き込み方を確立することを目的とします。続く「テキスト内の概念をマップで表示する」は、学生たちがテキストで読んだことを自分なりに理解して、「マップ」という方法で、「自分の理解を示す」ことです。さらに、After Readingでは「定義」とは何か、なぜ重要か、どのように書くかを学び、キーワードの定義を書くことが、学習成果となります。

シラバスにおいて重要なのは「評価」です。授業の初日に、学生たちはこのシラバスを通じて、どのような学びの成果が求められているのか、何が評価されるのかが明確に示されます。コース共通テストの番号は、「求められる学習成果」の番号です。また、評価対象となる課題で何が求められるのかも示されており、学生たちはシラバスを使って、自分なりに学習計画を立てるのです。

教材からの学び

ELAでは学生の学びに適切と思われる論文を編纂した『ELA Reader』を使用します。学生の1年間の学びを見通して、学ぶ時期に応じたテーマ、トピック、さらにトピックのもとで、どのような読み物が適切かを考えて編纂したものです。

3 を見てみましょう。春学期のテーマはDiscoveryです。トピックは、「教育の価値」「批判的思考力」「文学」です。学期当初に学生たちは、リーディングを通して「たとえ教員が言ったことや教科書に書いてあることでも鵜呑みにせず、自分はどう思うのかを学ぶ」というメッセージを受け取ります。入学当初の学生たちにとって、「学習」とは、先生の話を聞き、教科書の内容を学ぶことです。しかし、「自分が考えることこそが学習である」というメッセージを受け取り衝撃を受けます。それが「新しい価値観との対峙」なのです。

秋学期のテーマはInward bound（自己は何かを熟考し、自己を再定位すること）です。トピックは、文化、認知、コミュニケーションです。RCAでは、「非言語コミュニケーション」についての内容から、日本人の非言語コミュニケーションスタイルについて、アメリカの学者が著した文章を読みます。学生は、これまで当たり前だと思っていたことを、異なる背景を持つ他者が見ると、どのように感じられるのかを学びます。また「人種問題」のトピックでは読み物を通じて「人種は科学的事実ではなく、ある学者が便宜上作ったカテゴリーである」と学びます。リーディングにより学生たちは新しい考え方と出会い、「自己とは何かを熟考し、自己を再定位する」ことになります。

冬学期のテーマはOutward bound（自らの立場を公言し、それに責任を持つ）です。「生命倫理」のトピックで学生たちは安楽死やクローン技術について読み、そのトピックについての自分の考えを発表します。そして、「将来へのビジョン」というトピックも扱い、緒方貞子氏とヨハン・セルス氏が著した『人間の安全保障(Human Security)』を読みます。そして、人間の安全保障と国家の安全保障との違いを学び、人間の安全保障について考えます。求められるのは、「自分は比較的恵まれた家庭で、比較的恵まれたコミュニティで、比較的恵まれた国家に生まれて良かった」ということではありません。「地球市民として、地球の裏側で起きていること、地球の裏側で飢餓に面している人、地球の裏側で何かの権力の下で苦しんでいる人に対して、一地球市民として責任を持つ」ことを学ぶのです。さらに、将来へのビジョンとして、戦争という愚かな間違いを再び繰り返さないために、恒久平和への誓いを刻むことをトピックとして扱います。

学習活動からの学び、学習活動の取り組み

RCA、ARWのディスカッションでトピックについて議論します（**4**）。ディスカッションは、自分を表現することに慣れる場です。入学してまもなく、学生たちは「このトピックについてどう思うのか」と何度も問われます。初めは、「教科書に載っていることだし、有名な人が書いたことだから賛成」などと答えますが、ディスカッションを重ねるうちに、「自分の考えを表現すること」に慣れていきます。ディスカッションを進めるには、役割分担が重要です。AS（Academic Skills）の授業を通じてグループリーダー、ノートテーカー、タイムキーパー、リポーターの役割があることを理解し、役割を体験します。

また、異なった意見の中で他者、自己を理解することも学びます。学生は「自分の考えが当たり前だと思っていたが、自分とは違った考えを持つ人がいる」と知ります。他者の意見と触れて初めて、自分の考えが固定概念にとらわれていたことを知るのです。

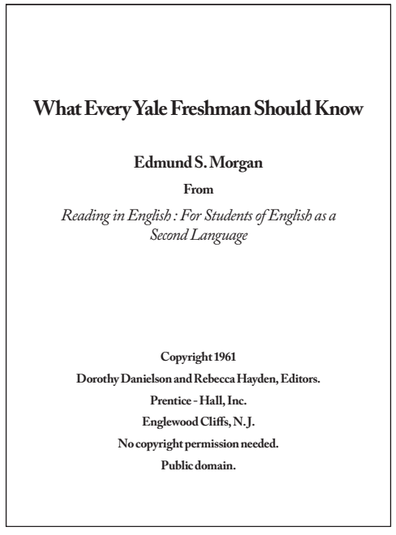
最後に、複数の意見をまとめるなど、問題解決方法を学ぶことができます。グループディスカッションをした後は、クラスでの報告やグループプレゼンテーションを課します。複数の意見をまとめる能力が求められ、学生は問題解決能力を習得していきます。

1 精読コース シラバス

トピック 教材	教育の価値 What Every Yale Freshman Should Know
Before reading	1. テキストの内容を推測 （著者、トピック、読者、目的） 2.テキストのトピック確認
While reading	6.テキストへの書き込み方法を学ぶ 7.テキスト内の概念をマップで表示
After reading	11.「定義」とは何か、なぜ重要か どのように書くかを学ぶ 10.キーワードの定義を書く

評　価	コース共通テスト：2、9、11
	評価対象課題：6、7、8、9

2 ELA Readerより


What Every Yale Freshman Should Know

Edmund S. Morgan

From

Reading in English : For Students of English as a Second Language

Copyright 1961
Dorothy Danielson and Rebecca Hayden, Editors.
Prentice - Hall, Inc.
Englewood Cliffs, N. J.
No copyright permission needed.
Public domain.

3 教材からの学び：ELA Reader

春学期：Discovery
（新しい価値観との対峙）
教育の価値&批判的思考力　／　文学

↓

秋学期：Inward bound
（自己は何かを熟考し、自己を再定位）
文化、認知、コミュニケーション　／　人種問題

↓

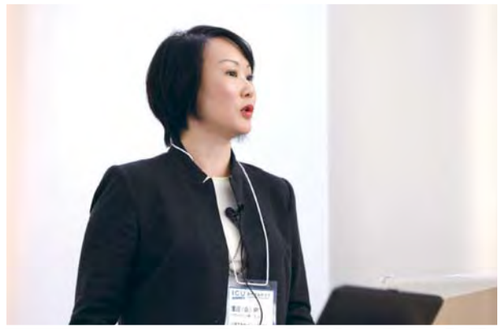
冬学期：Outward bound
（自らの立場を公言し、それに責任を持つ）
生命倫理　／　将来へのビジョン

4 学習活動からの学び：Discussion

学ぶ共同体の具体化、学生間の学び

- 自分を表現することに慣れる場
- グループ内の役割分担
- 異なった意見との中で他者、自己を理解
- 多様な背景を持った他者との対話から多元的な視点の培養
- 複数の意見をまとめる等、問題解決方法を学ぶ

本学のリベラルアーツ教育において大切とされる「批判的思考力」と同等に不可欠とされている能力が、「論文作成能力」です。論文作成は、学術活動の最終アウトプットにあたります。そのプロセスには、情報のインプット、統合、アウトプットが含まれます。具体的には、文献を読み、講義を聞き、討論をしたりして得た情報を、正確に理解して、自分なりに意見を構築し、最終的には論文という形にして発信していきます。ELAのライティングの特徴とは、この論文作成に至るプロセスを「英語で行う」ことであると言えるでしょう。



Presentation 02

Writing をどのように教えているか

論文作成を通して身に付く批判的思考力

ELA 専任講師 渡邊（金）泉

Writingの進め方

アカデミックライティングとは

入学まもない学生には、**アカデミックライティング**の知識がありません。日本語でも英語でも、学術論文を見たこともなければ、読んだことも、もちろん書いたこともないのです。そこで、まず基礎の基礎からライティングの指導を始めます。全員必修の読解と論文作成のコースとは別に、講義や図書館オリエンテーションなどにおいても、アカデミックライティングとは、次のようなものであると学びます。それは—作文でもなく／要約でもなく／客観的根拠をもとに／可能な限り客観的に／論理的に／アカデミックな言葉で／主張を論じること—です。たとえば、授業の課題、卒業論文、修士論文、博士論文、また学会や専門誌で発表する研究論文、教科書や学術書籍などです。

何のために書くのか

アカデミックライティングは、学者間のコミュニケーション手段です。大学に入学してまもない学生に、君たちもこのグループに属すのだと言うと驚かれます。しかし、学問に従事するものは、学生であってもすべて学者とみなされるのです。学者にとってのライティングとは、研究成果を発表する手段でもあり、自分の意見や主張の発信でもあります。それは他人に読んでもらうだけのものではなく、自分の考えを整理し、理解を深めるためにすることでもあります。

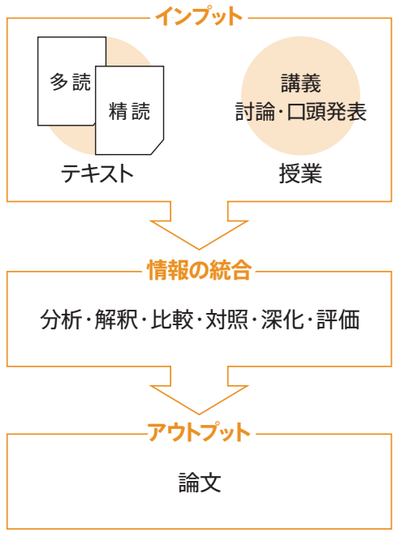
論文作成プロセス

論文作成にあたっては、パラグラフライティングから始めて、徐々に字数を伸ばしていきます（ **2** ）。扱うトピックもリーディングと同様に、主観的なトピックから学際的なトピックへ発展します。主観的なトピックの場合はあまり資料を必要としませんが、学際的なトピックになるにつれ、参考資料が必要になってきます。論文作成のプロセスは、テーマの選定から始まり、資料の収集、その解釈、分析、評価を経て、論理の形成・執筆・推敲といった作業が含まれます（ **3** ）。きめ細やかに指導するため、週3回の授業に加え、チュートリアル（個人指導）が重要な役割を果たしています。

パラグラフライティングとは

入学当初は身近なトピックを扱います。春学期は「教育の価値」をテーマとし、大学とはどんなところか。なぜ大学に入学したのか。大学でどんなことをしたいのか…などをディスカッションし、パラグラフを書きます。トピックには書き手の主張、メインアイディアと補足説明が含まれます。パラグラフは、書き出しのトピックセンテンスで、自身の意見をはっきり述べます。続くサポートの数行でその理由を述べ、結びとなる最終行で再度自身の意見を繰り返す。1行目で書いた自分の意見を、意味を変えずに自分の言葉で言い換えるのです。

1 学術活動のプロセス



2 2014年度ライティング課題（Stream3）

学　期	ライティング課題
春	パラグラフ
	Academic Reaction Paper 1（300〜500語）使用資料数 1
	Academic Reaction Paper 2（300〜500語）使用資料数 1
	5パラグラフ・エッセイ（500〜800語）使用資料数 1〜3
秋	エッセイ1（小論文）（800〜1000語）使用資料数 5以上
	エッセイ2（小論文）（800〜1000語）使用資料数 5以上
冬	エッセイ（小論文）（1200〜1800語）使用資料数 5〜10
	Winter Project（共同執筆）使用資料数5〜10
2年生 論文作成法	エッセイ（小論文）（1500〜2000語）使用資料数10以上

5パラグラフのエッセイ

エッセイはIntroduction〜Body 1〜Body 2〜Body 3と展開し、Conclusionで締めくくります（ **4** ）。IntroductionはBodyの導入として、背景説明や読み手の興味を誘う工夫が必要です。書き手の一番伝えたいThesis Statement（主題）も明示します。本文の各パートはトピックセンテンスで始め、補足説明を付けます。どのパートも最終的には、Thesis Statementをサポートするように論理を展開します。**5パラグラフ**全体で自身の主張をサポートする論理的な流れを作ることが重要です。日本語の場合は、読み手が書き手の言いたいことを推測して読みますが、英語の場合は読み手に推測させてはいけません。書いたものを他人に読んでもらい、内容が伝わるかを確認することが大切です。

引用の仕方を知る

主張に説得力を持たせるにはサポートが必要です。権威の言葉の引用、統計データの提示など、サポート方法は様々ですが、まずは参考資料を探す方法を学ぶ必要があります。ELAでは1年次の早い時期から、資料を用いて文章を書く訓練を始めますが、ライティング指導と図書館オリエンテーションも連動しています。文献を探す際に必要なのは、データベース検索で得た膨大な資料の中から、何を使用するのかを判断できるようになることです。学生たちは検索して瞬時に情報を得る方法は知っていても、取捨選択する方法を知らないことが多い。だからこそ、批判的思考能力は必要不可欠な能力となります。

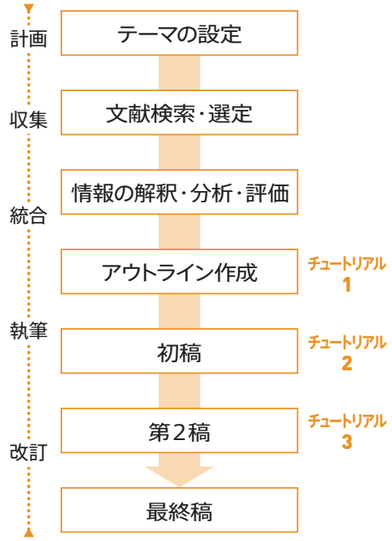
他人に読んでもらい改訂する

参考資料を得たら、その情報をどのように自分の論文に取り入れるかを学びます。学生には剽窃の意味を繰り返し教え、どのように引用したらよいのかを示します。引用ばかりしないよう、パラフレーズのスキルを生かしてまとめます。こうして徐々に書き上げた論文のドラフトを、読み手の反応や意見を取り入れつつ改訂していく作業に入ります。この場合の読み手とはクラスメイトや担当教員のことです。このようにして、約10週間で計画からスタートした論文作成のプロセスは、情報収集、統合、執筆、改訂の各ステージを経て完成に至ります。

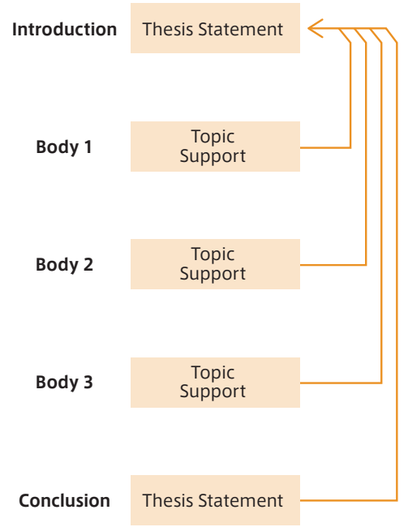
評価はプロセスを重視

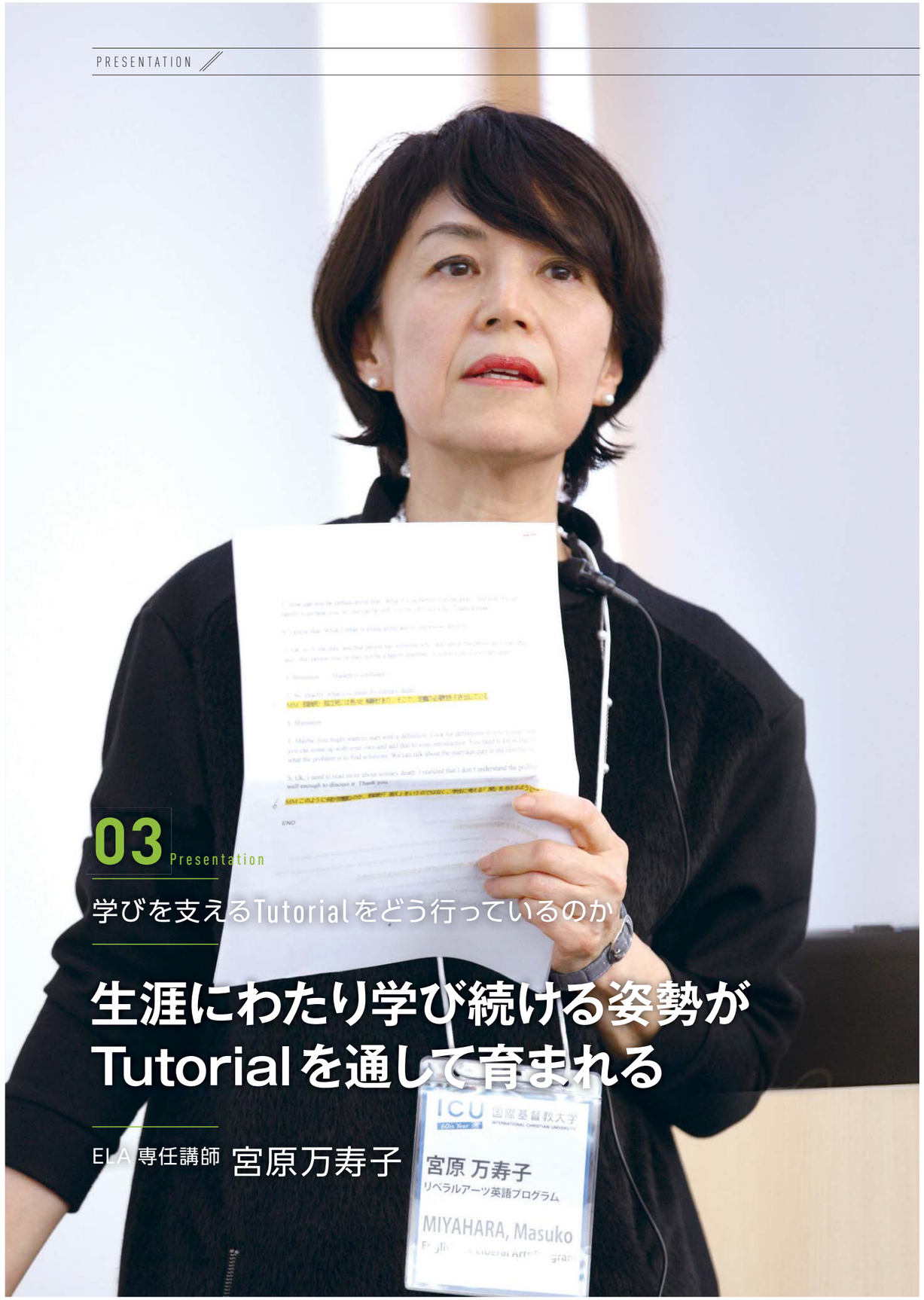
論文の最終評価にはクラスメイトのコメント、自己評価、担当教員の評価などを考慮します。クラスメイトの書いた論文を客観的に評価するのも大切な学びです。ただ「おもしろい」、「興味深い」とほめるのではなく、具体的に何がよいのか、どこを直すとよいのか、建設的なコメントの仕方も学びます。教員の評価は、論文の出来栄えよりもプロセスを重視します。学生は初年次の大半をELAで過ごし、ライティングと思考力を身に付けます。ELA課程の修了時に批判的思考力がどれだけ身に付いたかを判断するのは現実的には大変難しいのですが、学生の論文を見ると、英語のライティングスキルの向上のみならず、思考力も身に付けた様子が伺えます。

3 論文作成のプロセス



4 5パラグラフのエッセイ





03 Presentation

学びを支えるTutorialをどう行っているのか

生涯にわたり学び続ける姿勢がTutorialを通して育まれる

ELA専任講師 宮原万寿子

チュートリアルは本学の英語教育プログラムの特長の一つです。みなさまは、チュートリアルと聞いて、何を連想されますか?一般的には「個人指導」の意味で解釈されることが多いと思います。しかし、本学ではチュートリアルを次の3つのキーワードでとらえています。1つ目は「個人指導」、2つ目は「サポート」、そして3つ目は「自律した学習者の育成」です。今日はこの3つのキーワードを中心に、まずは「チュートリアルとは何か」、それから、その位置付けをご説明したうえで、最後にスキットを通して、チュートリアルを実際にどのように行っているのかをご紹介いたします。

■ 3つのキーワード

Tutorialの進め方

コア授業を支えるチュートリアル

ELAのコア授業である「**RCA（精読）**」と「**ARW（多読）**」にはそれぞれチュートリアルの時間が付加されます。原則としてはARW週2回、RCA週1回の**チュートリアル**が設定されていますが、実際には個々のニーズに応じて、一学期間に多数回にわたり指導を受けています。学生が担当教員に面談予約を取ったうえで、チュートリアルを受けるのが通常パターンです。

では、実際にどのようにチュートリアルが導入されているのかを学習過程を見ながら簡単にご説明しましょう。**1** の**RCA**の場合、学生はまずその学期の中心となるトピックに関連する講義を受講します。テキストを精読し、要点をとらえ、著者の論理の展開の仕方やキーワードの定義の仕方、また、筆者の論点を支える具体例の選び方などを分析することを学びます。その後、自分の言葉でパラフレーズしたり、サマライズしたりしながら、正確に読み書きができる力を付けていきます。

一方 **1** の**ARW**では「多読」を出発点にし、授業でそのテーマについて討論をして多様な解釈に触れ、自分の意見を構築し、それを論文にしていく、という学習過程を経ます。ただし、すべての学生がこの学習過程をスムーズに進められるとは限りませんので、「**個人指導**（チュートリアル）」の時間が設けてあるのです。RCA、ARWの両方において、学生のニーズに応じて随所にチュートリアルを取り入れています。

英語での学びを深めるために

このように本学では、1年次は英語で講義を受け、英語で英語圏の大学生が読む教材を読み、英語で討論をし、英語で自分の考えを表現していきます。その学びを深めていくために、チュートリアルが果たす役割は大きいと言えます。

本学の学生は英語力が高いと思われがちですが、必ずしも全員が英語に堪能とは言えません。そこで、個々の英語力に応じた「**サポート**」が必要となります。授業は基本的に英語で行っており、チュートリアルも原則としては英語で行うことになっていますが、学生の英語力に応じて、指導効果をより高めるために、日本語を使用する試みも行っています。バイリンガルの教員の場合は特に、日本語と英語のどちらでチュートリアルを行うのかを、学生自身に選択させています。

つまり、チュートリアルは「指導」であると同時に、学生への「サポート」でもあります。

学生が自ら課題を見つけ、考え、答えを導き出す力を育む

チュートリアルを語るうえで、もう一つ重要なキーワードがあります。それは「**自律**」です。「自律」とは、自分の学習に責任を持つ、つまり、自ら学ぶ姿勢をつくり出すことができる学生を育てていくということを意味します。本学の初年次教育は「論理的思考力」や「批判的思考力」をいかに高めるかということが基盤となります。これは簡単に言えば、物事を鵜呑みにせずに、自ら思考しようとする力を伸ばすということです。

チュートリアルのねらいは、こうした「思考力を伸ばす」ことにあります。たとえば、チュートリアルでは学生が相談しにきたからといって、担当教員が手取り足取り、すぐに答えを示すことはしません（ **3** ）。担当教員は学生と対話をしながら学生が自ら課題を見つけ、深く考え、解決策を導き出すきっかけを与えます。つまり、学生が「自主的に学ぶ姿勢を創り出す」ことが、チュートリアルの目的なのです（ **2** ）。

チュートリアルは「教員からの呼び出し」ではありません。あくまでも、学生が自分の必要に応じて個別指導を受けるものです。そのため、自分でスケジュールを決めて、まず、担当教員とのアポイントを取るところから始めます。具体的にはたとえば、学生はGoogleドキュメントで共有している「チュートリアル：サインアップシート」を使い、チュートリアルを受けたい時間にサインアップします。このように本学ではチュートリアルのプロセスすべてを通じて、学生の自主性を育んでいます。

自律的学習者を育てるために

このように、チュートリアルには様々なねらいがあります。

マクロレベルでは次のようなことが一例として挙げられます。

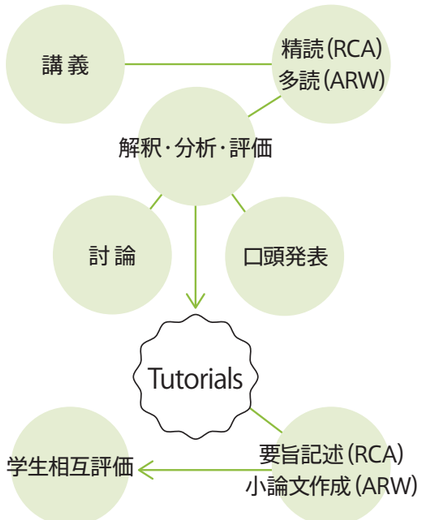
- 多様な背景を持った他者との1対1の対話を通して、多元的な視点を持てるようになる。
- 1対1の空間の中、異なる価値や思想に接し、他者との新たな関係の中において、自己を見つめ直すことができる。
- 自分の社会や文化を当然視することなく、開かれた価値観を持つ人材になる。
- 違う他者との出会いは、閉鎖的で排他的な世界観から自己を解放し、さらなる自己開発につなげることができる。

また、マイクロレベルでは次のようなことが挙げられます。

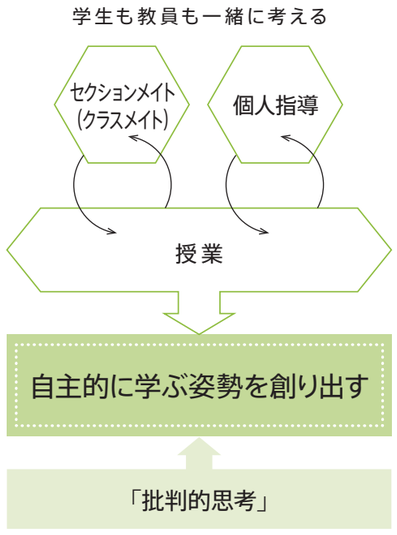
- 自律的学習者の養成、いわゆる生涯学び続けようとする主体性の育成。
- 的確に教員に質問ができたり、アドバイスを受けたりすることができる。これは、のちに専門課程に進んだときに役立つ。
- 批判的思考力を養い、自分の課題を客観的に見られるようになる。

チュートリアルは教員主導ではなく、あくまでも学生主導の学びです。学生が自主的に取り入れ、教員のアドバイスを受けながら、学びを深めていきます。学びは一生涯続くものです。だからこそ、生涯にわたって学び続けようとする積極的な姿勢を身に付けることを目的とした、チュートリアルが重要となってきます。

1 分析読解・要旨記述（RCA）および トピックに関する意見構築（ARW）の学習過程



2 自律した学習者の育成



3 スキット：Thesis Statement Tutorial

ある学生がセクションメイト（クラスメイト）から受けた主題についてのコメントに悩んで来室した際のチュートリアルです。

T: Teacher　**S**: Student

T：So, tell me exactly what seems to be the problem with your thesis. What did your section mates tell you?

ねらい▶ 自分で問題点がはっきり言えるかを見ている

S：They said my logic is funny.
T：Logic. So, what's wrong with your logic?

ねらい▶ さらに問題点を突き詰める

S：I don't know… They said solitary death and marriage are irrelevant or something like that.
T：Irrelevant… Ok, explain to me WHY you think getting married early will prevent people from dying alone.

ねらい▶ 教師の質問を通して、学生は自分の考えをクリアにすることができる

S：Because if people get married early, they will have a family.
T：Ok, so how does having a family prevent people from dying alone.
S：Someone will be with you when you die.
T：How can you be certain about that? What if your family lives far away? And even if your family lives near you, no one can be with you for 24 hours a day, 7 days a week.
S：I know that. What I mean is dying alone and no one knows about it.
T：Ok, so if a person dies, and they have someone who cares about them and looks after them...and...that person may or may not be a family member...you don't call it a solitary death?
S：Mmmmm....
T：So, exactly, what do you mean by solitary death?

ねらい▶ 孤独死・孤立死にはいろいろと解釈があり、そこで、定義の必要性を引き出している

S：Mmmmm....
T：Maybe, you might want to start with a definition. Look for definitions in your sources, and you can come up with your own and add that to your introduction. You need to know exactly what the problem is to find solutions. We can talk about the marriage part in the next tutorial.
S：Ok, I need to read more about solitary death. I realized that I don't understand the problem well enough to discuss it. Thank you.

ねらい▶ このように何が問題なのか、教師が「答え」を言うのではなく、学生に考える「間」を与えるようにする

Presentation 04

Wコースについて - 専修分野に特化したアカデミックライティング -

英語で卒業論文を書くための橋渡しとなるWコース

ELA 課程准教授 深尾暁子

ELAを修了したのち、学生たちはどのように学び、専門性を深めていくのでしょうか。ここではELAと卒業論文をつなぐ、専修分野に沿った論文指導を行うWコース（Writing Course）について、ご紹介します。Wコースは2012年度に採択された「グローバル人材育成推進事業（現・経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援）」における3本の柱のうち、「英語開講専門科目履修を通じた情報発信能力（ライティング）の涵養」という柱を具現化した取り組みです（P.30-31参照）。専門分野にふさわしい英語論文の作成手法を身に付け、自らの知識を他者にわかりやすく伝える力を養うことを目指しています。

Wコースとは

ELAと卒業論文をつなぐ位置付け

Wコースは、専修分野に沿った論文の作成指導を通して、英語によるアカデミックライティング能力のさらなる向上を目指す科目です。専門科目を担当する教員が、各分野に特有の論文の書き方を指導し、大学院生がチューターとしてライティング課題の作成を支援します。

学生はELAでRCAやARWといった科目の履修を通じて英語で論文を書く力がついたと実感するようです。しかし、その達成度は一般的なアカデミックライティングの基礎の域を出ていないのが実情です。もちろん、教員が学生に期待するレベルが高いこともありますが、専門科目の教員や卒業論文の指導教員からは、自分の主張を書き言葉で十分に表現できていない学生がいるとの声が聞かれます。

そこで、ELA修了後に専修分野に特化したライティング指導の充実を目的として、Wコースを開設しました。Wコースは、**1** で示したように、ELAでの「アカデミックライティングへの導入と基礎練習」と、4年次の「専門分野に特化したライティングの実践」の集大成となる卒業論文の作成をつなぐ、パズルのピースのような位置付けです。学生は2年次冬学期にメジャーを選択します。メジャー選択の前後に履修する科目をWコースとして提供することで、学部教育の4年間を通して、「書き言葉による情報発信能力の育成」を、段階に添ってサポートするカリキュラムが編成されました。

Wコースは2013年度に開設されました。春学期には「歴史学（近代日本とICU）」、秋学期には「文学（現代日本文学入門）」、そして冬学期には「心理学（認知心理学）」という既存の専門科目をWコースとして再構築しました。2014年度は、歴史学、文学、心理学の授業は継続し、新たに各学期1コースずつ授業を開講しました。本学には31のメジャー(専攻）がありますので、将来的には各メジャーに1つずつWコースを設置できたらと考えています。

Wコースのための新しい支援体制

2 の「Wコース（1年目）のサポート体制」をご覧ください。既存の科目をWコースとして再構築する開講1年目には、たくさんのサポートを付けました。

まず、Wコース専任のライティング指導教員が専門科目の担当教員をサポートします。課題設計から授業活動、教材作成に関して、全面的に支援をする体制を整えました。また、専属のライティングチューターには授業に参加してもらい、学生がどのような指導を受けているのかを明確にしました。学生は、授業で担当教員から専修分野におけるライティングについて指導を受け、授業外でライティングチューターに質問や相談をしながら実際の課題作成に取り組みます。授業と授業外の両側面からライティングに関するサポートを受けることができるのです。

専門分野での論文の書き方を学ぶ

2013年度秋学期にWコース（1年目）として開講された「現代日本文学入門」の例をご紹介しましょう（ **3** ）。担当教員は、学生が書く文芸批評論文の質を上げるためには、ELAのライティング指導だけでは不充分だと感じていました。そこで、文芸批評論文の書き方を示す独自の教材を作ることにしました。それが"**How to write a Good Literary Analysis**"です。加えて、論文例を示し、評価基準を明らかにするルーブリックも用意しました。これにより学生は、自分の書いた論文が何を基準に評価されているのか、またはどういうところがAで、どういうところがBで、どういうところがCなのか、といった次につながるフィードバックを受けることができるようになります。

文芸批評論文の文章構造はTitleから始まり、The Introduction → Thesis Statement → The Body of Essay → The Conclusion → Works Citedという流れになります。ELAで取り組んできた5パラグラフのエッセイとまさに同じ構造です。

一方、文芸評論とは、自分なりの評価を表現することです。独自の教材を作ったことで、文学入門の入口に立つ学生にとっては、自分なりの視点、自分なりの解釈、自分なりの評価を前面に押し出して書かなければいけないということが明確になりました。

学生はELAで「客観的に書くこと」を大事にしており、「一人称のIは使わない」と指導を受けています。しかし、文学の担当教員は「文芸批評においては、一人称のIを使って自分の考えを表現してもよい」ととらえています。そして、「書き言葉」で「現在形を使って書く」といったことも示しました。文章構造という大きな枠組みから、言葉の使い方まで、文芸批評論文を書くということについて示し、文学の分野で求められる論文作成に役立つ教材を作ったのです。

Wコースの課題と成果

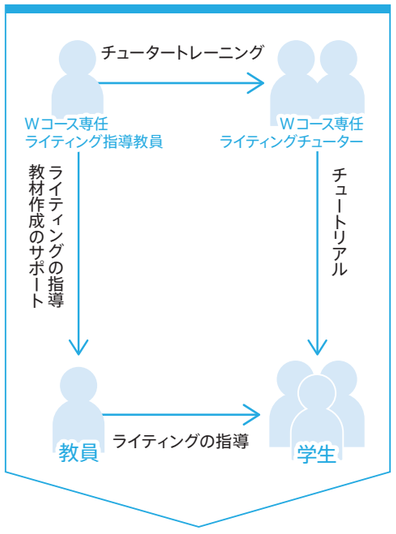
Wコース2年目以降は、支援体制が変わります。**4**「Wコース（2年目以降）のサポート体制」をご覧ください。1年目に作成した教材を使って、教員はライティング指導を行い、アドバイスやコンサルティングが必要な場合には、ライティング指導教員から引き続きサポートを受けられるようになっています。Wコース専任のライティングチューターの代わりに、ライティングサポートデスクという既存の学生サービス機関に所属するライティングチューターが学生サポート役を務めます。チューターたちはチューター指導教員から、あらかじめWコースの内容や課題について説明を受けるので、専門外のチューターも適切なチュートリアルができるようになります。

こうして2年間で7つのWコースの開発と実施に関わってきましたが、段々と課題も見えてきました。Wコース担当教員からは、ライティングチューターの利用が不十分であった、準備に時間がかかったというフィードバックがありました。一方で、着実に成果もあがってきています（ **5** ）。

ELAのように、長い歴史と経験によって練り上げられたカリキュラムと比べ、Wコースは未成熟な試みではありますが、学生のアカデミックライティング能力のさらなる育成を目指し、一人でも多くの学生が英語で卒業論文に自信を持って取り組めるようになることを願っています。

1 4年間を通したライティング能力の涵養

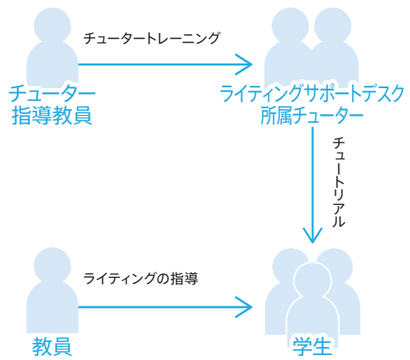
2 Wコース（1年目）のサポート体制



3 文芸批評論文作成のための教材とクラス活動

- How to write a Good Literary Analysis Paper
- Annotated Sample Papers
- Grading Rubric
- Lecture on Features of the Literary Analysis Paper
- Database Use Orientation

4 Wコース（2年目以降）のサポート体制



5 成果の例

- 準備に時間はかかったが、最終的には効率がよかった
- 学生により分かりやすく、公平に感じられる採点基準を設定できた
- 採点作業が楽になった
- ライティング指導教員と専門科目担当教員の間に、ライティングに関する対話が生まれた
- ライティングの指導や学習教材の開発などにELAの指導法を応用できることが分かった
- 学生の提出する課題の質が高まった
- 学生への有効なフィードバックが提供できるようになった
- 学生のライティングに対するモチベーションが上がり自信が深まった
- ライティングチューターの有効性が認識された

05 Panel Discussion ELAで学んで

ELA*の学びを通して、学生たちはどんな力を身に付けたのでしょうか。ICUで学ぶことの意義をどのようにとらえているのでしょうか。学部生や大学院生、卒業生が語り合いました。

* ELAは、ELP (English Language Program) を発展させて、2012年度より開始しました。

ICUで学び、知った自分の立ち位置

卒業生 渡貫 諒

法学・政治学のダブルメジャーを修め、学士修士5年プログラムにて修士（専修分野：国際関係論）を取得。現在、社会科学研究所助手。在学中に英語開講科目を70単位ほど取得。

より良い就職先を探すために大学へ進学し、学ぶという考え方もあるようですが、私はそうではないと思います。大学で学ぶということは「自分の立ち位置を正確につかむこと」だとELP（現・ELA）を通して理解しました。私はもともと、それほど英語が得意ではありませんでしたが、積極的に英語を使って先生とコミュニケーションを取るようにしていました。そして、学部在学中は卒業に必要な136単位中の70単位を英語開講科目から履修しました。それは英語を学びたかったからという理由ではなく、その授業を担当している先生に魅力を感じ、その内容が興味深いと思ったからです。そして、その授業はたまたま英語で開講されていたということです。私は法学と政治学のダブルメジャーを修め、修士では国際関係論を専修分野として国際法を専門としました。学びが深まるにつれて、自分の発言はすべて、日本という文化的背景に基づくものだということを実感しています。ICUで学び、いろいろな背景を持つ人と接する中で自分の立ち位置を理解し、人の発言や考え方には、その人がもつバックグラウンドが色濃く表れるのだと感じました。

英語を通じて違う視点で物事を考えられるように

教養学部4年 秋山 肇

高校在学中に交換留学生としてメルボルンに1年間留学。平和研究・国際関係学のダブルメジャーで卒業予定。現在、学士修士5年プログラム候補生。昨年、英語で執筆した論文で、第29回佐藤栄作賞※優秀賞受賞。英語で卒業論文執筆中。

※佐藤栄作賞…故佐藤栄作元総理大臣が1974年に受賞した、ノーベル平和賞賞金を基に設立された「佐藤栄作記念国連大学協賛財団」事業の一環として行われている国際コンテスト。1980年に創設され、1990年以降毎年開催されている。

ICUに入学し、ELP（現・ELA）の授業を受け、大学としてのアカデミックな学びに対する信念を感じました。この信念にICUの特徴を感じています。言葉にはものの見方が含まれると思います。英語を知ったことで、日本語で見ていた世界を違った視点で見ることができるようになりました。他の言語を知るということは、自分の視野を広げ、感性を豊かにするうえで大事なことだと思います。物事を多角的に見ることができ、自分の判断基準を得ることができるからです。私にとって英語とは専門分野を学ぶうえで必要なツールです。研究テーマである「アフリカ連合」については日本の文献が少なく、英語で書かれた文献を読まざるをえません。今、自分が学びを深めるうえで、ELPで身に付けた英語力や幅広く読んで得てきた知識が役に立っています。日本語と英語という2つの言語を得ることで、自分が日本語に頼っていることを認識し、いかにそこから脱却できるかを考えています。英語で学ぶことを通じて、自分が変わるという経験をしてきました。

鍛えられた思考力は共生社会で必要な基礎力となる

修士2年 森 由樹子

1年次にオーストラリア夏期海外英語研修（SEA）に参加。3年次のイギリスへの交換留学をきっかけに英語教育の可能性を再認識。現在、大学院で言語教育を専修し、ELAのTeaching Assistantを務め、英語科の専修免許を取得中。

ELP（現・ELA）を修了してから感じたのは、ELPでの学びは英語能力を伸ばすだけでなく、学問をするうえで必要な能力を伸ばすことにつながるということでした。私は学問や学術で必要な力だけではなく、共生社会で生きていく基盤となる力を伸ばすことができたと思います。英語を通じて思考力が身につき、さらに一段上の高次元な視点から物事を客観的に見ることができるようになりました。ELPでは徹底的に、批判的思考力や論理的思考力が鍛えられます。異文化を理解し、多様な価値観を受け入れる姿勢も身に付きます。数々の文献を英語で読み、批判的に物事をとらえ、パラフレーズをして、自分の考えを英語でまとめていく。その当時は苦しくて大変な思いもしましたが、実際に留学も経験してみると、その学びが自分の力となっていたことを痛感しました。このような力が身に付いたということは、自分が今後、多文化共生社会で生きていくうえで必要なことだと痛感しています。

知的好奇心が刺激されるELAでの学び

教養学部2年 丹波 小桃

1年次に夏期海外英語研修（SEA）でダブリン大学へ。サブリーダーを務め、現地イベントの企画運営に携わる。国内サービス・ラーニングで特定非営利活動法人フェアトレード・ラベル・ジャパンにてボランティアインターン。

私は将来、途上国に関する仕事がしたいという漠然とした思いがありました。しかし、大学進学にあたっては、何を専門的に学べば良いのか、そのアプローチの仕方が見えませんでした。だからこそ、ICUに入学し、昨年1年間ELAで幅広い分野にわたる文献を読んで学んだことで、知的好奇心が刺激されました。はじめから専門分野が絞られていたら、到底知りえない、触れることのない分野についても英語で文献を読み、学びを深めることができたのは、自分にとって貴重な経験であり、そうして1年間学びきったことが、自信につながりました。そして、ELAでの学びが自分の専門分野を今後深めていくうえでの基盤となるということを感じています。英語で文献を読み、多角的な視点で考えられる力がつき、専門分野で必要な言語で思考を深めていける力がついたこと、それこそが、英語で学ぶことの意味なのではないでしょうか。

06 Panel Discussion 教員の側から

学部生や大学院生、卒業生の発言を受けて、教員たちも、自身の教育にかける想いやELAの補足説明、ICUの教育方針を紹介しました。司会進行は森本あんり・学務副学長。

英語でものを考えること。違う考え方のフレームワークを持つこと。自分の伝えたいことを伝えるためには、自分の言葉の枠組みではなく、相手の枠組みに合わせて考えることが求められる。相手の枠組みを想像しながら語らなければ、伝えることはできない。

自分が変わるような学びに触れ、経験を積む。リベラルアーツの教育は、学生がどれだけたくさんの知識を身に付けたかでなく、知識を身に付ける学生自身が変貌することを目指す。ELAも同じで、英語能力を高めることではなく、学生自身が変貌していくことがゴール。その成長を間近に見ることが、教員のやりがいになる。

大学に入学する際、自分が何を専門にしたらいいのかわかっている学生がどれだけいるのか。大学での学びは入学してからでなければわからない。入学して幅広い学びの分野に触れたうえで、専門性をみつけていってほしい。

学生の求めるレベルに応じられるだけの学びにつなげるためには、教員も学ばなければならない。常に新しい視点で新しい文献を読み、どのように学びを構築していくかを考えている。

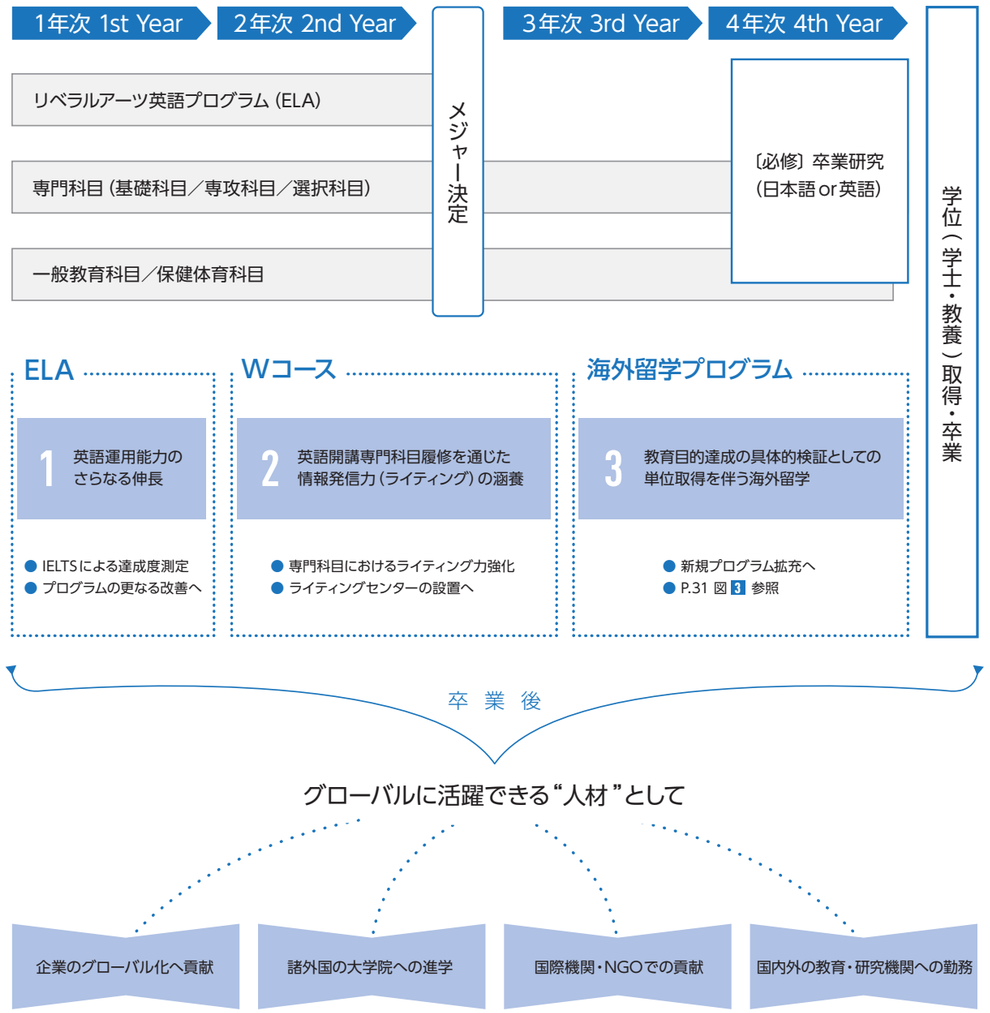
自分の専門外の分野の教材を開発することで、知的興味が満たされる。ICUの学生は、こちらがやればやるだけ返してくれる。それが自分にとってのモチベーションにつながっている。

自分の価値観とは違うものの考え方に出会うことは大切。物事を批判的に考え、論理的に組み立てる、複数の視点で多角的に見て一面的な評価をしない。それはリベラルアーツの学びのなかで身に付けたい能力。それを身に付けるために英語で学ぶ。

グローバル人材とELA

2012年度、ICUの取組が、大学教育のグローバル化のための体制整備を推進することを目的とした文部科学省「グローバル人材育成推進事業（現・経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援）」（平成24～28年度）に採択されました。ICUは国家の枠を超えて設立された大学として、献学当初から60年間にわたり一貫して世界を舞台に人類の平和と共存に実践的に貢献できるグローバル人材を育成してきました。そして今、この目標をさらに高いレベルで実現することを目的として、以下の3本を柱に取組みを進め、今後もICUの教育理念を体現した人材を世界に送り出し続けていきます。

グローバル人材育成の3本の柱



1 英語運用能力の伸長

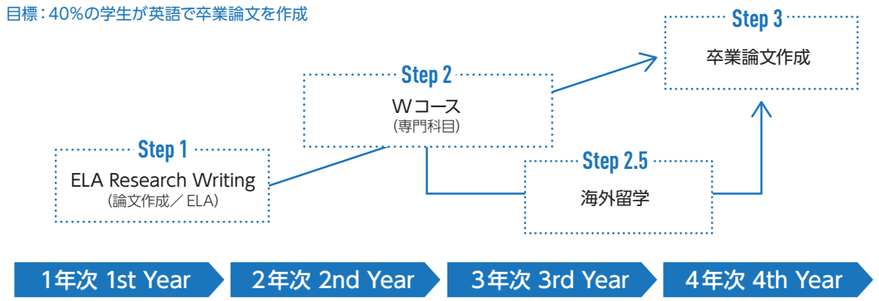
4月入学生が1・2年次に履修する、リベラルアーツ英語プログラム（ELA）。実践的な英語力を身につけながら、批判的思考力も磨き、ELA修了時には、海外留学プログラムの参加要件となる、IELTS※「総合点6.5」の取得を目指しています。

● リベラルアーツ英語プログラム（ELA）の導入	英語によるアカデミックスキルの修得 習熟度別教育（Stream1-4） 英語開講の専門科目の履修を可能に 留学を可能に
● 全員がIELTS※を受験（ELAの一定の科目修了後）	4技能（リーディング、リスニング、ライティング、スピーキング）が測定可能
● 目標水準IELTS「総合点6.5」	海外大学への留学時に求められるレベルの英語力

※ International English Language Testing System（IELTS）とは、留学のために必要な英語力を証明する、英語能力判定試験。イギリス、オーストラリア、カナダ、ニュージーランドのほぼ全ての高等教育機関で認められており、アメリカでもTOEFLに代わる試験として入学審査の際に採用する教育機関が3,000を超える、英語力証明のグローバルスタンダードテストです。

2 英語開講専門科目履修を通じた情報発信能力（ライティング）の涵養

専門分野にふさわしい英語論文の作成手法を身につけ、自らの知識を他者にわかりやすく伝える力を養います。



3 教育目的の具体的検証としての単位修得を伴う海外留学

単位修得を目的とした留学で、現地の学生や世界各国から集まった学生と同じ授業に参加し、グループワークやディスカッションなどを通して、真のグローバル人材としての力を培います。

目的＼エリア	アメリカ、ヨーロッパ、オセアニアで学ぶ	アジア、アフリカで学ぶ
英語運用能力を伸ばす	海外英語研修（SEA）プログラム（P.5参照）	
夏休みなどの短期間で興味ある分野を学ぶ	UC*1サマーセッションズ　イギリス文化研究 ドイツサマープログラム　海外フランス語研修 海外日本語教育実習	韓国サマープログラム　香港サマープログラム
学びを海外で活かす		国際サービス・ラーニング（P.9 図4 脚注参照）
学びを深める	交換留学など　ACUCA*2プログラム	

主な参加学生
1、2年次
2年次以上
3年次以上

*1 UC　University of California
*2 ACUCA　Association of Christian Universities and Colleges in Asia

国際基督教大学について

About The International Christian University

学部·学科

教養学部 アーツ·サイエンス学科

所在地	東京都三鷹市
学生定員	620名（1学年）
献学年	1953年

CAMPUS AREA

620,000㎡

キャンパスの広さは62万平方メートル。
東京ドーム13個分、東京ディズニーランドよりも
広い学内には、学生寮や教員住宅もあります。

リベラルアーツの学び

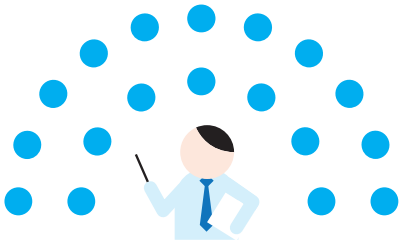
ICUは1学部1学科制。教養学部アーツ·サイエンス学科の中には、理系·文系にわたる31のメジャー（専修分野）があります。入学時には専攻を決めず、2年次の終わりまでに深めたい分野を選びます。リベラルアーツでの学びについて、詳しくは大学ウェブサイトをご覧ください：http://www.icu.ac.jp/

バイリンガル教育

日本語と英語がキャンパスの公用語。学生は「英語だけ」「日本語だけ」ではなく両方の言語を使って学びます。授業のほかにも、掲示や学内のウェブサイト、学食のメニューにいたるまで、ICUでは両言語が用いられています。

年2回の入学式と卒業式

献学初期から、年2回の入学式（4·9月）と卒業式（3·6月）を実施。約60年の歴史があります。9月入学の制度は海外からの入学者を受け入れやすく、2回の卒業式は、卒業後の国内外の多様な進路に対応できるICUにとっては当たり前の制度。世界に開かれたICUの象徴です。



1：18

FACULTY：STUDENTS

教員対学生の比率

密度の高い少人数教育は、献学当初からの徹底した方針。現在のST比（教員一人あたりの学生数）は、1：18です。少人数なので、一人ひとりにスポットがあたり、授業でのディスカッションも活発、さらに、オフィスアワーやコメントシートを設け、教員との対話の機会を増やしています。

外国籍教員の割合

33,8%

外国で博士号を取得した教員の割合

84,6%

世界的にも高い外国籍教員の比率。多様性を認めあう土壌があります。